「新批評」とは
- 概要、背景、方法、問題点 -

2019-11-13

石井　拓洋
女子美(院)非常勤（音楽文化論）

「新批評」new criticism とは

- 1930年～50年頃のアメリカでみられた文学批評の主潮流。本来は詩を対象とする批評。

- 作品を自律的なものと捉え、形式分析による内容解明を試みる批評態度。作家の伝記や時代背景を考慮しない。

- 1920年代、米国南部の詩人・批評家たちによって始まる。詩の雑誌「フュージティブ」(逃亡者、fugitive, 1922創刊) を中心とする一派。中心人物は、米国人 ジョン・クロウ・ランサム (1888-1974)。思想的には米北部の科学的合理主義への批判があった。

- 先史は19世紀末の英国の文学研究。リーヴィス（1895-1978）、リチャーズ(1893-1979)が中心。のちに雑誌『スクルーティニー』(吟味、scrutiny, 1932創刊)を中心とする一派。リーヴィス一派。それまでの印象批評を批判し、より厳密な批評の基準を模索した。

新批評　-その背景 1/3 -　文学研究・文学批評の誕生

- 英国19世紀後半、中産階級の政治・経済力の向上、宗教の停滞で、自らの支配体制の崩壊を危惧する英ヴィクトリア朝。

- 功利主義に偏重する中産階級の啓蒙の必要性。宗教の代わりとしての「文学」への着目。マシュー・アーノルド (批評家)。

- 文学により中産階級を貴族階級的に教育し、さらに下層の労働者階級をも教科すること。王朝にとっての「よき人間」を作ることで近代におけるヴィクトリア朝の新たな統治体制を確立させることを企図（c.f. イーグルトン, pp.37-39)。

- したがって、新批評のスタートは、歴史社会的・外在的背景があった。

新批評　-その背景 2/3-　英・リチャーズの「実践批評」

- 中産階級の啓蒙のため、より厳密な文学批評の方法が要された。

- 歴史学・心理学など (実証的だが外在的要素)を取り入れ、「精読」(close reading)を通して、より厳密な「実践批評」(practical criticism) へ。雑誌『スクルーティニー』(1932創刊)が批評の中心となった。

- 啓蒙に基づいた社会的で作品外部への態度が、次第に作品内部への厳密な分析へと関心が移動していく。

- 「外在的」批評態度 から 「内在的」なものへ（この概念はウェレックらによる)。

- イギリスのこの文学批評の態度が、同時期のアメリカへつたわる。

  英国の批評家リーヴィスやリチャーズら (リーヴィス一派)が橋渡しとなる。

新批評　-その背景 3/3-　米国南部で「新批評」が誕生

- 1920年代の米国南部社会では、北部の科学的合理主義への批判があった

- 北部の科学的合理主義が、南部の古き良き文化を破壊するとの危機感があった。これを救うのは「詩」の世界と考えられた。

- なぜなら、理性に基づく科学的態度とは別次元で、詩は感性に基づく芸術的観点において作品全体の有機的統一が求められるからだ。このような統一感を社会にももとめた。

- 「新批評」の名付け親は、J・C・ランサム。テネシー州ナッシュビル市ヴァンダービルド大学に集まる、詩人・評論家たちの一人。詩雑誌 「フュージティブ」(fugitive, 1922創刊)が活動の中心。

- 作品の成功の判断に関する「意図に関する誤謬」と「情動に関する誤謬」の二つの誤りを避ける（作者の意図の崇高さなどで判断しない。読者に与えた情動の強さで判断しない)。

新批評　　- その方法 -

- 作品を合理的に組み立てられた一つの有機体、自律した存在として「精読」する。

- 作者の意図 (個別的意図 = 表現内容の具体的意図)、作者の伝記的背景、作者が生きた歴史社会的背景、これらを考慮しない。ただし、作者の意図（一般的意図 = 有機的作品をつくろうとする意図）は前提として重視される。

- 作品の形式的要素(言葉づかい、構造) を細かく解剖する。

- 「イメジャリー」 (imagery) =　象徴、隠喩、類比に着目する。イメジャリー： ある語によって視覚的映像などが喚起される作用、または喚起された映像のこと。

- 要素間の「緊張」、「矛盾」、「両価性」を見い出す。

- 内容が一見「曖昧」だが、分析すると有機的構造が見いだせる作品をよしとした　　=　T.S.エリオット 「荒地」など。

- 「詩は有機体的社会そのものと化すべき」と考えられた。当初の北部社会への批判的態度から、詩内部への理想的世界へと関心が移動していく。

新批評　　- その問題 -

- 批評の前提として、啓蒙によって、人格的統一感をもち、必ず合理的な作品を作る「良き人間」の存在がある。

- この「良き」とは、権力者にとって「良き」ものではないか？

- 「良き」とは、作者や読者が無意識のうちに内面化するイデオロギー的な性格をもつものかも？（アルチュセールなど）

- そうすると、客観的で科学的なる「内在的批評」と考えられていた「新批評」も、じつは無意識のうちに主観的な「外在的批評」となっているのではないか？　（フレドリック・ジェイムソンなど）

- そもそも、作品の意味は、作品の内部構造だけで判断できるものだろうか？ →「受容理論」へ

参考文献、さらなる理解のために

- T・イーグルトン『新版 文学とは何か』大橋洋一訳、岩波書店、1983=1997 (第1章と第 2 章)。
- 筒井康隆『文学部唯野教授』岩波書店、1990 (上記イーグルトンの内容を踏襲した冗談めいた痛快な小説。小説内の講義シーンは恰好のイーグルトン解説となる)。
- 亀井俊介『アメリカ文学史・講義3 』南雲堂、2000年 (第1章) 。
- ジョゼフ・チルダーズら『コロンビア大学現代文学・文化批評用語辞典』杉野健太郎ら訳、松柏社、1995=1998。
- 川口喬一ら『最新文学批評用語辞典』研究社、1998。
- ウェレック、ウォレン『文学の理論』太田三郎訳、筑摩書房、1949=1980。

文学批評史概観

「作品自体」か？　　「社会との関わり」か ？

「テクスト主義」「内在的批評」　　「コンテクスト主義」「外在的批評」

・ 19世紀末 ： 英国ケンブリッジ大学に、大学史上初の 「文学講座」 が できる

・ 19世紀末 ： 印象批評、道徳的批評、伝記的批評、マルクス主義批評 （コンテクスト主義的 ）

・ 1910年頃 ： 〈ロシア・フォルマリズム〉 の批評 （ テクスト主義 ） ヨーロッパ

・ 1930年～50年頃 ： 〈新批評〉 （ テクスト主義 ） アメリカ

・ 1950年～70年頃 ： 〈構造主義批評〉、〈テクスト論〉の批評 （ テクスト主義 ） 仏、米

・ 1970年～ ： 〈受容理論〉、〈読者反応批評〉 （ コンテクスト主義 ） 独

・ 1980年～ ： 〈脱構築批評〉、〈精神分析批評〉 （ テクスト主義 ？ コンテクスト主義？ ） 仏、米

・ 1990年～ ： 〈新歴史主義批評〉、〈マルクス主義批評〉 の系譜 （ コンテクスト主義) 英、米